

令和 4 年 6 月 1 日現在

機関番号：15201

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2017～2020

課題番号：17H04525

研究課題名(和文)宋代古墓調査にもとづく伝統中国の社会・家族・ジェンダーの歴史的研究

研究課題名(英文) Historical Research on Society, Family, and Gender in Traditional China Based on the Survey of Ancient Tombs in the Song Dynasty

研究代表者

佐々木 愛 (SASAKI, MEGUMI)

島根大学・学術研究院人文社会科学系・教授

研究者番号：00362905

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 6,700,000円

研究成果の概要(和文)：研究期間中に福建・江西・浙江において宋墓を中心とした墓の現地調査を行い、32箇所
の墓について調査研究を行った。調査の結果、これらの地方では家族墓地を設けず、家族成員ひとりずつにつ
いて葬地をもうけて葬る単葬形式であるのが一般的であることを明らかにした。この事実は、斯界の名著・滋
賀秀三『中国家族法の原理』とは異なるものであり、滋賀家族法の原理の三原則の一つ「夫妻一体」をささえる
夫妻同葬が成立していなかったことを示している。さらに母子の墓を接近して作る諸例も『中国家族法の原理』
とは矛盾するものであり、『中国家族法の原理』を地域的な偏差の相のもとで再検討する必要があることを示す
ことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在の中国ではその強い父系制の親族観念が様々な社会問題を惹起していることで知られる。そして斯界の名著
である滋賀秀三『中国家族法の原理』は、中国の強い父系制の家族法は漢から清まで二千余年にもわたり基本的
に一貫していると説く。しかし我々は中国での墓の現地調査によって、『中国家族法の原理』が立論の根拠とし
ていた事象が宋代中国南方にはあてはまらないことを明らかにすることができた。これまで二千年間一律とされ
てきた中国の家族法にあっても歴史的・地域的に変化するジェンダー(社会的文化的性)の観点から捉えられるこ
とを示せた研究である。

研究成果の概要(英文)：During the research period, we conducted a field survey of tombs in Fujian,
Jiangxi, and Zhejiang, focusing on Song tombs, and conducted research on 32 tombs. As a result of
our research, we found that in these regions, it is common to have a single burial site for each
family member, rather than a family cemetery. This fact differs from Shuzo Shiga's "Principles of
Chinese Family Law," which is a well-known book in this field, and indicates that the same burial
ceremony for husband and wife, which supports one of the three principles of Shiga's Family Law, "
togetherness of husband and wife," had not been established. Furthermore, the various cases in which
mothers and children were buried in close proximity to each other also contradict the "Principles
of Chinese Family Law," indicating the need to reexamine the "Principles of Chinese Family Law"
under the aspect of regional deviations.

研究分野：東洋史学

キーワード：中国 墓葬 家族 ジェンダー

1. 研究開始当初の背景

中国家族史・ジェンダー史研究の分野では、1960年代に出版された滋賀秀三『中国家族法の原理』(以下滋賀『原理』と略称)が、今に至るまで通説でありつづけている。滋賀『原理』は、きわめて説得的な内容で、かつここで説かれた強固な父系性の家族原理は、紀元前2世紀(漢代)から20世紀初頭(清代末期)に至るまで一貫し変化しないとされたから、歴史的研究を行うこと自体を無意味化する枠組みを持っていた。その結果、日本の中国史研究者たちはこのテーマを回避するか、法制にかかわるごく限定的なテーマのみに集中し、研究は立ち遅れた。

その一方、中国、台湾、アメリカでは、家族史ジェンダー史研究が著しく盛んに行われるようになり、日本の中国史研究において家族史やジェンダー史という分野がボトルネックとなることが顕在化してきた。世界最先端と自負してきた日本の中国史研究にとっては由々しき事態である。また目を転じれば日本史研究や西洋史研究では家族史やジェンダー史のすぐれた研究が蓄積されてきており、日本の中国史研究におけるこの分野での立ち遅れが、特に日本史研究者が中国との比較史的考察を行う上で問題になっているという認識が、学界内でも共有されはじめた。

我々はそもそも南宋時代の裁判の判決文集『名公書判清明集』(以下『清明集』と略称)について20年以上にわたって訳注作成と共同研究を続けてきた研究グループである。2010年度からは、『清明集』掲載の事件現場である中国福建省・江西省・浙江省の各地で年に一度のペースで現地調査を行い、その地理的景観や宋代の史跡について調査報告書を発表してきており、宋代古墓についてすでに合計七箇所について調査・報告を行っている。

調査を行った7箇所の古墓のうち、6箇所について報告書を担当執筆したのは佐々木である。佐々木はこれまで儒教思想史の見地からの親族史研究を行ってきたが、墓を調査し報告書を執筆するなかで、朱子学系の学者である周敦頤の墓や、朱熹(朱子)自身が作った母の墓や、娘の墓が、滋賀『原理』とは乖離したものであることに気づいたのである。

むろん滋賀『原理』はあくまで原理であり、原理に乖離した現実があるのは当然であるが、周敦頤や朱熹は、誰よりも原理の実践にはやかましい傾向をもつ学統に属する。その彼らですら滋賀『原理』を原理としていなかったとなれば、滋賀『原理』が宋代当時の原理であったかどうかを疑わなければならない。

そこで佐々木は独自に河南省の二程墓・范仲淹墓の調査も行った上で、滋賀『原理』を問題化する論文を公表し、特に『ジェンダーの中国史』には巻頭に掲載されるなど一定の評価を得た。この成果を発展させ、中国家族史・ジェンダー史研究の進展のための基盤を形成したいと考えるに至った。

2. 研究の目的

中国史上の変革期である10世紀~13世紀(宋代)に作られた墓およびその関連史跡について、現地での実地調査を行い、文献史料と総合して分析を行い、1960年代から現在に至るまで斯界の通説でありつづけている滋賀秀三『中国家族法の原理』を克服、相対化して、中国家族史・ジェンダー史研究を今後活発化させるための基盤を作ることを目的とする。また、中国では宋代を含め歴史的人物の墓の史跡整備が急速に進められており、宋代古墓の史跡保存の状況調査を通して、現在の中国の社会経済状況やその歴史認識といった現在の日本にとって必要な情報を日本社会へ向けて還元する。

3. 研究の方法

現地調査地として選定したのは2017年度に江西(吉安・撫州)、浙江(武義・天台山・寧波)、2018年度浙江西部 福建北東部、2019年度に安徽(淮河中流域~合肥)、浙江(麗水・温州)、江西・福建・浙江を選んだのは2010年から独自に現地調査を重ねてきた地域であり、その経験を生かすことができるためであり、2019年度に安徽(淮河中流域)を選んだのは、この地が中国の南北の境界にあたる地域であり、南方の墓葬習俗習慣と比較するためである。

4. 研究成果

2017年~2019年度の三年間で福建・江西・浙江・安徽の計32箇所の墓や関連史跡を調査し、以下五本の調査報告としてまとめ公表した。

「江西省歴史調査報告：宋代古墓を中心として(吉安・撫州篇)」『社会文化論集』14

「浙江省歴史調査報告：宋代古墓を中心として(武義・天台山・寧波篇)」『東京大学経済学部資料室年報』8

「浙江西部・福建北東部歴史調査報告：宋代古墓を中心として」『東京大学経済学部資料室年報』9

「淮河中流域歴史調査報告 宋代古墓を中心として(蚌埠・鳳陽・合肥篇)」『社会文化論集』

「浙江省南部歴史調査報告(麗水・温州篇)：宋代古墓を中心として」『東京大学経済学部資料室年報』10

さらに2010年から2016年までの間に独自に行った6回の調査分も含め、総計11回の現地調査の総括を行い、『福建・江西・浙江の古墓・史跡調査記 2012-2019』と題した調査報告書を作成した。

現地調査が2019年度で終わっているのは、新型コロナウイルスの世界的流行により調査を行うことができなかつたためである。当初2020年度が最終年度であったが、2021年度に予算を繰越して状況の改善を待ったが、結果として状況は好転しなかつた。そのため、2020-21年度については調査報告をまとめ、文献史料や発掘調査報告書に基づく研究を行って、研究を総括した。

本調査で明らかにできたことは、我々が調査を行った福建・江西・浙江といった中国南方の地域各においては、夫婦合葬墓はかなりまれで、個々人の単葬墓が基本となっているということであった。かなりの大家族や宰相を輩出した名族といった、一族墓地を設けるための土地を購入することについて経済的な問題はないと考えられるケースであっても、一族墓地が形成されていないわけではなかつたのである。

これらの事象は、斯界の名著である滋賀秀三『中国家族法の原理』とは相反するものである。「中国家族法の原理」は財産権と祭祀権を表裏一体のものとして論じられるのが特徴であり、滋賀氏は祭祀法と埋葬法を同一に扱っている。そして、中国家族法の原理の三原則の一「夫妻一体」の祭祀権側の側面としてあげられるのが、夫妻が必ず同じ墓に埋葬されるという事象であった。我々のこの調査結果によって「中国家族法の原理」の根柢が一つ成立しなくなることになる。

『中国家族法の原理』の叙述との間に矛盾が生じたのは、われわれが現地調査を中国南方で行ったのに対し、滋賀氏が基づいたのは1940年代に河北で行われた中国農村刊行調査であったことと考えられる。滋賀氏が踏まえた河北地域の習慣では家族の墓を一箇所に作るものであったし、また我々が淮河流域 中国南北の境界で、北方の文化が色濃い地域を調査したところ、この地では家族墓として一家一族の墓を一箇所につくる習慣が広くみられた。一方、我々が主に調査を重ねてきた中国南方では風水思想に基づいて墓を作ることが一般的に行われていた。現地の古老にインタビューしたところ、被埋葬者個々人にとっての風水良地を求めて墓をつくるのであり、男性にとって良い地と女性によって良い地は違うのが当然という回答も得られた。そのような観念をもって墓をつくるのであれば、そもそも一族全員を葬る墓地 祖墳 ということ自体が南方では成り立ちにくいことが想定できる。風水思想の実のところスタンダードな形であったことと著しい対照をなしていたのである。なお、中国南方で唯一家族墓を見学できたのは南宋呂祖謙家族墓だったが、彼らは宋の南遷に伴って移住してきた一家であり、北での慣習をそのまま南で実践したにすぎないことが考えられる。

さらに、夫婦を一体として寄り添わせて葬るということそれ自体が儒教思想として礼意として共有されていたのかも再考の余地があると考えられる。北宋の道学者呂大臨を含む藍田呂氏一族墓が近年全面的に発掘が行われ、調査報告書も出版されたが、それによれば夫婦は同葬にしているが、同葬であっても墓室は夫婦で別にしているのが一般であったからである。(佐々木愛「北宋藍田呂氏家族墓園にみる家族秩序」伊東貴之編『東アジアの王権と秩序 思想・宗教・儀礼を中心として』汲古書院、2021年)これは「夫婦別あり」の礼意を生かした埋葬法と想定できる。男女を別にするという発想は現在の墓でもみられ、江西吉安浄居寺で参観した現代のロッカー式納骨堂は男性の区画と女性の区画が完全に分かれており、家族単位での使用というのはなかつたことは印象的であった。

その他『中国家族法の原理』と矛盾する埋葬例としては、母と子、祖母と孫の墓をごく近くに作り、父の墓は遠地に設けたり、むすめの嫁ぎ先の一族の墓と近接して墓を設けるなどといった父系制観念とは外れる墓も幾つか看取できた。これらの事柄は、『中国家族法の原理』を地域的な偏差の層においてとらえることの必要性をあらためて示したものといえる。

なお、墓の調査を通じて、著名な宋人の墓を大規模に整備して一族の結集をはかろうとしたり、あるいは地域興しの中核にすえようとしたりする事業が各地で現在進行形で行われている状況についても、先述の調査報告書のなかで報告することができた。

さらに、新型コロナウイルスの影響で中国現地調査ができなくなった2020-21年度は、文献史料や発掘報告書に基づく研究にシフトして各人がそれぞれ研究を進めたが、とくに滋賀秀三『中国家族法の原理』を克服する研究としては、代表者佐々木愛による「父子同気」概念の成立時期について--「中国家族法の原理」再考」(『東洋史研究』79-1)、「近世中国における生命発生論 母子間の継承関係と父系制」(小浜正子編『東アジアの家族とセクシュアリティ--規範と逸脱』京都大学出版会)が滋賀家族法の原理の根幹とされている「父子同気」の概念は歴史的に生成されたもので宋代朱熹によって比較的近い形が生まれたが、結局完全な形では成立しえなかつたことを明らかにし、特に前者の論文で2021年に第31回蘆北賞を受賞している。また研究分担者大澤正昭は『妻と娘の唐宋時代』(東方書店、2021年)を出版し、小説史料や裁判史料から『中国家族法の原理』の枠にあてはまらない唐宋時代の活躍する女性像を広く一般読者に向けて伝え、『読売新聞』『日刊ゲンダイ』など各種新聞紙上の書評欄で取りあげられるなど、読書界に歓迎されている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計14件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 佐々木愛	4. 巻 79-1
2. 論文標題 「父子同気」概念の成立時期について 「中国家族法の原理」再考	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東洋史研究	6. 最初と最後の頁 35-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐々木愛	4. 巻 18
2. 論文標題 朱熹『家礼』における家族とジェンダー 特に女性の儀礼参加をめぐって	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 社会文化論集	6. 最初と最後の頁 91-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24568/54251	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大澤正昭	4. 巻 65
2. 論文標題 『浦ボウ農咨』から考える	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 上智史学	6. 最初と最後の頁 103-141
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大澤正昭	4. 巻 12
2. 論文標題 太湖デルタ地域の 農業危機 宋～清代の農書を題材に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 唐宋変革研究通讯	6. 最初と最後の頁 23-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大澤正昭ほか	4. 巻 65
2. 論文標題 『浦ボウ農咨』試釈	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 上智史学	6. 最初と最後の頁 63-101
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大澤正昭ほか	4. 巻 66
2. 論文標題 『農言著實』テキスト研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 上智史学	6. 最初と最後の頁 35 - 70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 兼田信一郎	4. 巻 24
2. 論文標題 書評大津透編『日本古代律令制と中国文明』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 唐代史研究	6. 最初と最後の頁 162-169
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐々木愛・大澤正昭・石川重雄・戸田裕司・小川快之・小島浩之	4. 巻 16
2. 論文標題 淮河中流域歴史調査報告 宋代古墓を中心として(蚌埠・鳳陽・合肥篇)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 社会文化論集	6. 最初と最後の頁 1-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐々木愛・大澤正昭・兼田信一郎・石川重雄・戸田裕司	4. 巻 10
2. 論文標題 浙江省南部歴史調査報告（麗水・温州篇）-宋代古墓を中心として	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東京大学経済学部資料室年報	6. 最初と最後の頁 48-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大澤正昭監修・杉浦廣子編	4. 巻 13
2. 論文標題 『明代日用類書研究論文・著作目録稿』中文版	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『中国古代法律文献研究』	6. 最初と最後の頁 560-596
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐々木愛・大澤正昭・石川重雄・戸田裕司・小川快之	4. 巻 9
2. 論文標題 浙江西部・福建北東部歴史調査報告 宋代古墓を中心として	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京大学経済学部資料室年報	6. 最初と最後の頁 47-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐々木愛・兼田信一郎・石川重雄・戸田裕司	4. 巻 62
2. 論文標題 福建南部・内陸部歴史調査報告：『清明集』的世界の地理的環境と文化的背景 ショウ州・順昌篇	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 上智史学	6. 最初と最後の頁 155-175
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐々木愛・大澤正昭・石川重雄・戸田裕司・小川快之	4. 巻 14
2. 論文標題 江西省歴史調査報告 宋代古墓を中心として(吉安・撫州篇)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 社会文化論集	6. 最初と最後の頁 21-46
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐々木愛	4. 巻 8
2. 論文標題 浙江省歴史調査報告 宋代古墓を中心として(武義・天台山・寧波篇)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東京大学経済学部資料室年報	6. 最初と最後の頁 56-68
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計5件(うち招待講演 3件/うち国際学会 4件)

1. 発表者名 佐々木愛
2. 発表標題 儒教の『普及』と近世中国社会
3. 学会等名 2021年比較家族史学会第68回春季研究大会シンポジウム「東アジアはどこまで『儒教社会』か? チャイナパワーとアジア家族」(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 佐々木愛
2. 発表標題 「父子同気」と中国家族法の原理
3. 学会等名 国際日本文化研究センター共同研究会(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐々木愛
2. 発表標題 中国家族法の原理再考 思想史の見地から
3. 学会等名 明清史夏合宿2019（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐々木愛
2. 発表標題 中国における墓葬からみる家族関係
3. 学会等名 『中国ジェンダー史研究入門』出版記念科研公開研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石川重雄
2. 発表標題 宋代的聖節与佛教教団
3. 学会等名 径山禅宗祖庭文化論壇（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計12件

1. 著者名 大澤正昭	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東方書店	5. 総ページ数 296
3. 書名 妻と娘の唐宋時代 史料に語らせよう	

1. 著者名 佐々木愛、石川重雄、大澤正昭、小川快之、兼田信一郎、小島浩之、小林義廣、戸田裕司、原瑠美、松浦晶子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 報光社	5. 総ページ数 300
3. 書名 福建・江西・浙江の古墓・史跡調査記2012-2019	

1. 著者名 小浜 正子、板橋 暁子、佐々木愛、小川快之ほか	4. 発行年 2022年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 402
3. 書名 東アジアの家族とセクシュアリティ	

1. 著者名 漢字文献情報処理研究会(千田大介、小島浩之、佐々木愛、小川快之ほか)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 好文出版	5. 総ページ数 572
3. 書名 デジタル時代の中国学リファレンスマニュアル	

1. 著者名 伊東 貴之、佐々木愛ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 汲古書院	5. 総ページ数 948
3. 書名 東アジアの王権と秩序	

1. 著者名 戴建国、佐々木愛ほか	4. 発行年 2020年
2. 出版社 大象出版社	5. 総ページ数 335
3. 書名 宋代筆記国際学術研究会論文集	

1. 著者名 KOHAMA Masako、GROVE Linda、SASAKI Megumi、OSAWA Masaaki、Yoshiyuki	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Kyoto University Press、Trans Pacific Press	5. 総ページ数 518
3. 書名 Gender History in China	

1. 著者名 小浜正子、佐々木愛、大澤正昭、小川快之ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 台大出版中心	5. 総ページ数 527
3. 書名 被埋没の足跡－中国性別史研究入門	

1. 著者名 吉澤 誠一郎、石川 博樹、太田 淳、太田 信宏、小笠原 弘幸、宮宅 潔、四日市 康博、小川快之 ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 378
3. 書名 論点・東洋史学	

1. 著者名 松永 昌三、吉原 健一郎、田村 貞雄、栗田 尚弥、小川快之ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 朝倉書店	5. 総ページ数 392
3. 書名 領域の歴史と国際関係(上)前近代	

1. 著者名 千葉正史、大澤正昭ほか	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東洋大学アジア文化研究所	5. 総ページ数 76
3. 書名 中国史研究と史料利用の現況	

1. 著者名 小浜正子・下倉渉・佐々木愛・高嶋航・江上幸子(編著)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 486
3. 書名 中国ジェンダー史研究入門	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	戸田 裕司 (TODA Yuji) (10242794)	常葉大学・外国語学部・教授 (33801)	
研究分担者	小川 快之 (OGAWA Yoshiyuki) (10400798)	国士舘大学・文学部・特別任用教授 (32616)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	大澤 正昭 (Osawa Masaaki) (30113187)	公益財団法人東洋文庫・研究部・研究員 (72622)	
研究分担者	石川 重雄 (ISHIKAWA Shigeo) (50636678)	公益財団法人東洋文庫・研究部・研究員 (72622)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
連携研究者	小島 浩之 (KOJIMA HIROYUKI) (70334224)	東京大学・大学院経済学研究科・講師 (12601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関